

三木清の実践哲学—協同主義の哲学的基礎— 岩井洋子

京都学派は15年戦争の最中、西田幾多郎をはじめとして、政治哲学の領域で重要な意見を提示している。戦後、これらの多くは戦争協力の主張とされ、断罪されてきた。しかし、彼らの主張には戦争という異常事態を好機として捉え、生産体制の転換を企図したものもいた。その一人が三木清である。

I 協同主義の経済

三木清は日中戦争がはじまる頃、「資本主義問題の是正」の必要を説いた。これは時代相応的な見方をすれば、当時の戦時体制構築に向けての経済体制の変革を意味する。自由主義的資本主義が利潤の追求を至上命題とするため、生産性の向上を重視する戦時の生産体制に転換する必要があったからである。ただ、三木の真の狙いは別にあった。彼はこの戦時体制を好機として、一気に新たな経済体制を構築しようとしていたと推される。三木の考えた新たな経済体制とは彼が言うところの「協同主義」の経済であった。

協同主義経済の目的は、公益の原理に規制される経済共同体の建設である。そして、公益主義を実現するために、生産関係は職業能力によって把握され、職能者は自発性、創意が重視される。(職能原理)そして、物はその効用に即して最大限の生産性が要請される。(効用の原理)また、企業は営利に拘泥せず社会全体利益のために活動することが義務付けられる。(公益の原理)かかる原理から、企業の現代的形態である会社所有者(株主)と会社経営者の分離(所有と経営の分離)が帰結される。そして、労働者も経営者も職能という基準で捉えられるため、労働者は職能者とされ、経営陣は経営のテクノクラートとされる。したがって、労使対立の構造はみられない。

このような総力戦体制下に生まれた企業体は1940年体制として、戦後の高度成長の基礎をなしたと元大蔵官僚の野口悠紀雄は指摘している。

II 協同主義を支える三木の哲学

ものづくり協同体としての企業という把握の基礎には三木の「ものづくり」論がある。これは彼の技術論、構想力の論理へと拡大し、後期三木の哲学の支柱をなすことになる。以上のような協同主義はどのような三木の哲学的背景があるのか。それを明らかにするのが本報告の目的である。

1 「ものをつくる」ということ

三木の師である西田幾多郎は主体と客体を区分する西洋哲学に抗して、主体と客体の一体化を主張した。そして「ものをつくる」とは主体と客体たる「もの」が一体化することであると説く。これは芸術作品の創造を念頭に置いたものであるが、三木はこのモデルをもの制作一般に拡大してゆく。

そこで重要なのは三木独自の技術論である。三木は主体と環境が対立し、これを調和させるのが技術であるとする。つまり、主体が客体を含む環境に働きかけるが環境がこれを拒絶する場合がある、その場合、環境に適応し、あるいは新しい環境をつくるのが技術であるとするのである。その際、主体が環境の性格を見抜くには、環境に寄り添う姿勢が必要である。このものづくりの精神はさらにものの生産にも拡張される。かくて企業とは単

なる営利追求を目的とした団体ではなく、こうしたものづくりの協同体と捉えられることになる。

2 協同体の社会的基礎

三木はこうした協同体としての企業の前提として、その社会的基礎を次のように考えた。「東洋的ヒューマニズム」は「ゲマインシャフト的」であり「共同社会に於ける人倫的關係そのものうにある」。したがって協同体の基礎はゲマインシャフト的な地盤が必要である。ただ、ゲマインシャフトは封建的な性格は払拭されるべきでゲゼルシャフト的要素をもつ必要がある。そして、そこでは個人が尊ばれると共に個人的な営利を抑えた全体主義的であることが求められる。

3 社会的身体と歴史の形成

三木は他の京都学派の人々と同様に歴史哲学に向かった。三木は各個を個人としてだけではなく、社会を形成する身体と捉えた。そして、歴史を形成するのはこの社会的身体を共有する各個の行為であると考えた。歴史は当該行為の前に積み上げられ、「状況」となって現れる。この「状況」を三木はものづくりの環境のように考えた。したがって社会的身体はこの環境に働きかけ、ときに対立しつつ新しい環境たる歴史が形成されることになる。

三木は戦時中、世界史的視点から「時間的には資本主義問題の解決」が重要課題となっており、「資本主義の営利主義を超えた新しい制度に進むこと」が要請されると主張する。つまり、上述の当時の「状況」はかかる新制度を求めていたのであり、社会的身体はそうしたことを共有せねばならないと三木は考えていたのである。ところで三木は一貫してフォイエルバッハの「解釈ではなく変革を」というテーゼを重視して哲学における「実践」を説いていた。その意味ではこの資本主義問題を是正する方法としての協同主義は、三木の実践であった。

4 パトスとロゴスの総合

三木は技術論を総括し、技術とはパトス(情念)とロゴス(理論)の総合であり、構想力を通じて形をつくるものとした。ここに構想力とはもの(あるいはこと)に形を与える力を言う。ところで、三木は技術が呪術に始まると考え、この呪術こそ技術の原型と捉えた。呪術においてロゴスは薄弱であるが、環境を支配しようとするパトスが強力に働いている。そして、強弱はあるものの、現代の洗練された技術においてもパトスが働いていると三木は考えた。三木はこの技術の観念を拡張し、制度もこの技術により設計され、支えられるとした。しだかつて、制度の変革はかかるパトスとロゴスの総合によってもたらされると考えた。

資本主義制度の改革は企業協同体というロゴスによってなされるが、問題はパトスである。これに合致したのは一億総火の玉とも称された戦時の緊急体制であり、人々の熱意である。こうした情熱は戦時体制構築ではなく、資本主義の変革に転用される、これが三木の狙いであった。

三木は企業協同体というロゴスと総力戦体制下の人々のパトスを利用して資本主義という制度の改革を企図したのである。三木は自己の実践重視の哲学に忠実であった。つまり、資本主義制度の変革を自己のロジックに従い実行したと評することができる。